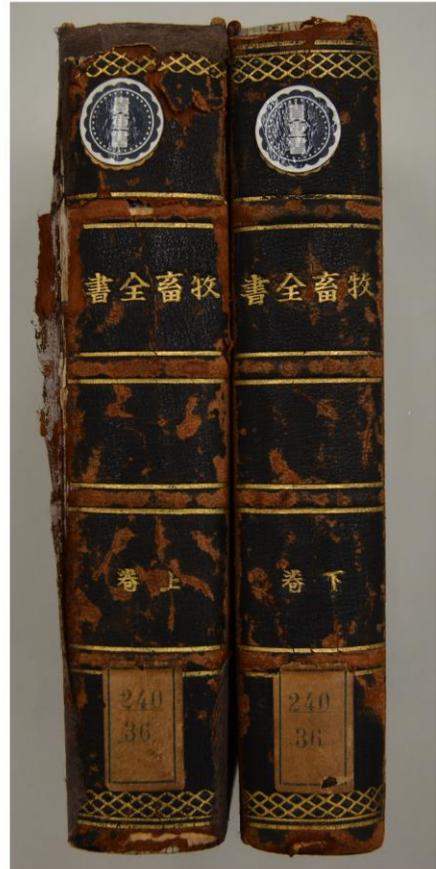
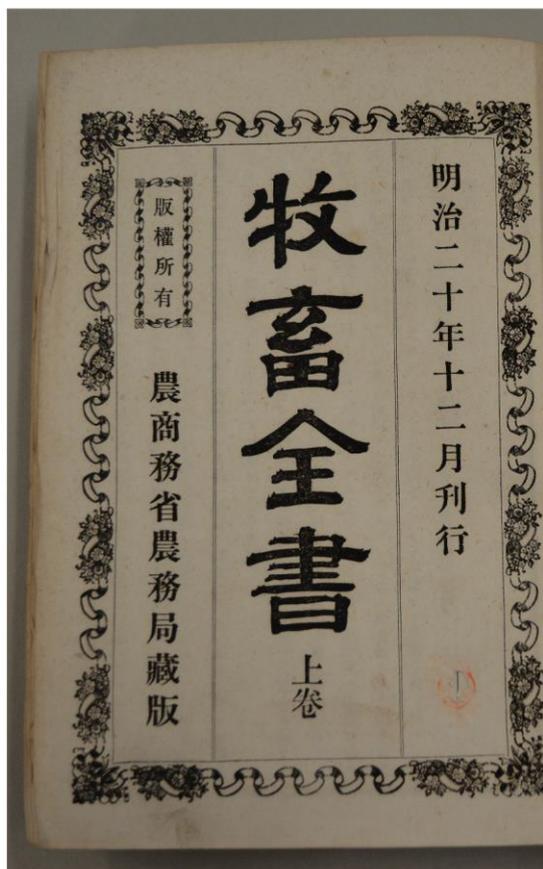
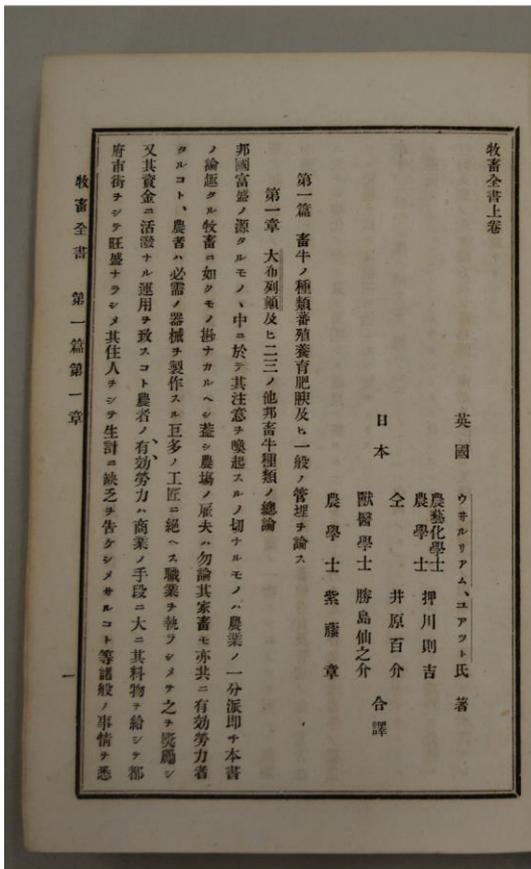


大学史資料室通信



『牧畜全書』上下巻(*) 押川則吉が訳を行った

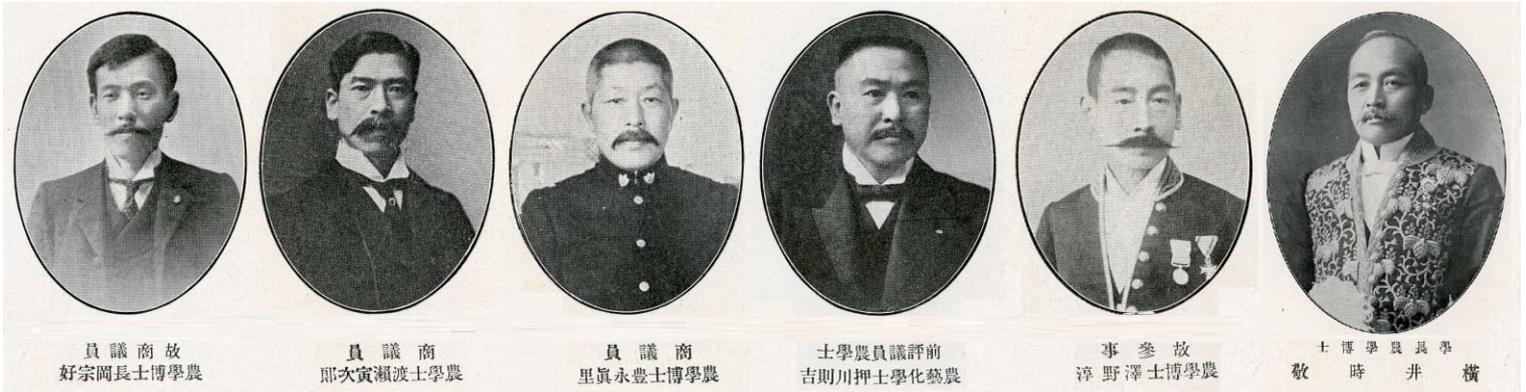
東京農業大学の人々(八)

—農商務次官となった押川則吉—

大正七年(一九一八)二月に、本学初代学長の横井時敬が読んだ、一通の弔辞が遺されている。その一節で、横井は、「顧みれば余の同窓の雙玉として世に誇るを得たりしものに君と酒勾博士とあり。共に俗界に身を処せりと雖も今の世に珍しき清廉高潔の士なりき。而して時と場合とは相異なりたれど孰れも不幸自裁して非命に逝きぬ」と述べた。「酒勾」とは、明治三〇年代に、農政課長・農務局長として名をはせた、明治農政の立役者・酒勾常明(農学博士)である。そして、「君」とは、弔辞の当時、農商務省所管の官営製鉄所(八幡製鉄所)長官であった押川則吉を指す。横井の駒場農学校の同級生のうち、双璧とも言えるのが酒勾と押川で、ともに俗界(学問の世界とは別の官界・民間)で身を立て、清廉高潔な人物だったが、不幸にも二人とも自殺してしまったというのである。酒勾は、財界の大御所渋沢栄一の請いにより、農務局長を辞し、大日本製糖社長に就任したが、部下の起こした贈収賄事件の責任をとってピストル自殺した(日糖疑獄事件)。他方、押川も、官営製鉄所における贈収賄事件の責任をとって自殺したのである(一説には持病の糖尿病亢進

のためという。

さて、農大史上、名図書館長として知られる大野史朗が編纂の任にあたった、最初の本格的な大学史である『東京農業大学五十年史』（一九四〇年）には、「明治二八年四月、初めて、評議員の制を設け、横井時敬、沢野淳、押川則吉、豊永真里、渡瀬寅次郎、長岡宗好の六氏は、本校評議員を委嘱せられ、重要校務を審議す」と記されている。この六人のうち、横井は別として、沢野、渡瀬、長岡については、本連載においてすでに紹介した（順に本紙第八・三・七号）。この評議員会は、私立東京農学校が、育英会から榎本武揚に譲渡されたのち、大日本農会に経営移管されるまでの苦難の揺籃期に、学校経営の維持・改善を企図して、極めて重要な役割を果たした組織である。評議員の一人である押川則吉は、文久二年（一八六三）一月二十九日、薩摩藩士押川乙五郎の長男として鹿児島の高見馬場に生まれた。旧名を千代太郎という。明治九年（一八七六）県から選抜されて、翌一〇年農事修学場（のちの駒場農学校）予科に入学、農学科に進学し、明治一三年（一八八〇）六月、二期生として横井時敬とともに駒場農学校農学科を卒業した。さらに同年、新たにできた同校農芸化学科に改めて入学、明治一六年（一八八三）同科を卒業後は農商務省農務局御用掛と



『農大十五周年写真帳』(*)より

なった。

この時期、押川はわが国初の農学系学術研究団体である農学会の誕生に大きく係わっている。すなわち、駒場農学校農芸化学科が誕生した当時、在校生によって研農会という一種の研究会が組織され、機関誌として『研農会誌』が創刊された。押川はこの研農会の初代幹事であり、活動の中心であったが、明治一八年（一八八五）七月、新潟県に転任、同県属・農商課長に就任したため、研農会も自然消滅のような形となった。この研農会こそ、明治二〇年（一八八七）に創設された農学会（のち財団法人農学会、また農学会からは多くの学術団体「学会等」が派生）の母体なのである。すなわち、研農会が一時の中断を経て、改めて創設されたのが農学会であった。

押川は、間もなく新潟県から農商務省に戻り、商務局一等属・商事課長となった。明治二一年（一八八八）には仏国巴里府万国博覧会事務官補を命ぜられ渡仏、その序をもって農事経済取調のため二年間欧州滞在を命ぜられた。この間、農務局一等属となり、帰国後は同技師、また農務局の筆頭課である第一課長、農事課長を歴任した。

やがて、明治二七年（一八九四）に始まった日清戦争の結果、日本は台湾を領有することとなり、翌二八年に台湾総督府が設置される

と、押川は同府の民政局殖産部事務官・農商課長に就任、翌年には橋口文蔵（元札幌農学校長）の後を継いで殖産部長に就任した。殖産部は明治三〇年（一八八七）に廃止となったため、その在任期間は短かったが、在職中は甘蔗栽培や製糖の改良、樟脳や烏龍茶生産の振興などに努めた。その後、山形県知事に就任、さらに大分・長野・岩手・熊本の各県知事を歴任した。

明治四一年（一九〇八）農商務次官に就任した。次官の時に大きな社会問題となっていたのが、足尾鉍毒事件と並び、日本の公害事件の原点とされる別子銅山煙害事件であった。押川はこの事件の解決に尽力し、完全に解決されるのはさらに後年のことであったが、明治四四年（一九一一）一〇月には、愛媛県越智・周桑・新居・宇摩四郡被害農民二二万余人代表者より「感謝状」を贈られている。ちなみに、押川次官のとき、横井時敬は政府の鉍毒調査会委員を務めた。

大正元年（一九一二）内務次官に転任、この間、貴族院勅選議員となった。さらに、同三年（一九一四）に製鉄所長官（親任待遇、従三位勲二等）に就任したが、同七年（一九一八）二月一日、前述のように自ら命を絶つことによつて、その生涯を閉じたのであった。葬儀は青山斎場において行われ、この時、横井時

敬が読み上げた弔辞は、「実に押川氏の全人格生涯の事を遺憾なく表現」したものであったと評価されている。

大日本農會報第四百四十一號 雜 墓

院、製鐵所、大日本農會、農學會、農科大學同窓會其他の弔辭ありて喪主、遺族、親族、會葬者一同玉串を捧げ禮拜して式を畢りぬ時に十時四十分、夫より柩は喪主遺族近親知友に衛られて桐谷火葬場に向ひ同所に於て茶毘に付せられ二十二日青山共同墓地の塋域に葬る、君は明治十三年駒場農學校を卒業し同十六年出で、農商務省御用掛となり二十九年同省技師に任じ後、臺灣總督府民政事務官、同總督府事務官を経て、山形、大分、長野、巖手、熊本の各縣知事に歴任し四十一年農商務次官に進み同四十四年貴族院議員に勅選せられ大正三年六月製鐵所長官に任せられ特に親任官の禮遇を賜ふ、訃天聽に達するや勅使を差遣はされて幣帛を賜ひ又在官中の功績を思召されて祭料として金二千圓を賜ふ、君天資英敏材識人に過ぐ夙に頭角を顯はして到る處令名あり國家の前途君に望を屬したるもの多大なりしに天壽を全ふせずして忽奄として館舎を捐てぬ國家の爲に深く之を惜む享年五十七、葬儀當日に於ける松平本會頭の弔辭、農科大學同窓會總代としての横井博士の弔辭左の如し

弔 辭

以て諒とする所余は幸に尙ほ駒場に出入するが故に此學風の維持に力めつつあり斯る清潔の空氣の感化を受けたるものが身を俗界に置くは或は其所を得ざるものか濁流には醒れむこと能はずいへば君といひ酒匂博士といひ残念ながら其身の置處を得ざりしものと謂ふべきか余は君が製鐵所長官たるを以て決して嬉しき思はざりき君が嘗て農商務大臣に擬せられたる際には同人間大に喜んで相慶したりき不幸にして事成就するに至らざりしも前途ある君の事なれば他日を期し得べしと信んと竊に待ら

食料環境経済学科 教授

友田 清彦

七六

大日本農會は農藝委員農學士農藝化學士押川則吉君の長逝を追悼し恭しく弔辭を呈す
大正七年二月二十一日

大日本農會會頭 松平康莊

余は茲に押川君の爲めに同學出身者の總代として哀悼の辭を致さんとするに臨み萬感交々胸に來往して言葉を見出すこと能はず願みれば余が同窓の雙玉として世に誇るを得たりしものに君と酒匂博士とあり共に俗界に身を處せりと雖も今の世に珍しき清廉高潔の士なりき而して時と場合とは相異なりたれども孰れも不幸自裁して非命に逝きぬ酒匂博士の場合に於ては清浦子爵が見舞はれて「併し見事であつた」との挨拶の一言悲歎に暮れたる我々友人をして克く釋然たらしめたりき今度の君の場合に於ては之れと異なり不幸にして其處決の原因が不明なる丈け幾多毀譽の批評あるを免かれざれども何人も君に後めたき事慮ありたりとは認めず反て高潔なりしが故に克く處決せりとなせり是れ切めてもの事となすべきか抑、君と余とは明治十一年駒場農學校に於て始めて相知り同學同級にて而かも同じ寄宿舎に起き臥したること數年隨分喧嘩をもなしたれども互に相識ることの甚だ深かりしを信ぜずんばあらす君の學才に長けたるは云ふまでもなく君が人格材幹につきて余は人に遇ふ毎に稱揚せざることなかりき君の明晰なる頭腦と處務の才能とは君をして遂に自ら求めずして地位を農藝界以外に得るに至らしめたること経路こそは異なれ酒匂博士と轍を同ふしたる其幸は反て不幸となれり思ふに駒場の空氣は清潔なり其が出身者は名の爲めに學を曲げず利の爲めに節を折らず此の如きは先輩諸氏の範を垂れたる所自ら駒場の學風となれり是れ余等の竊

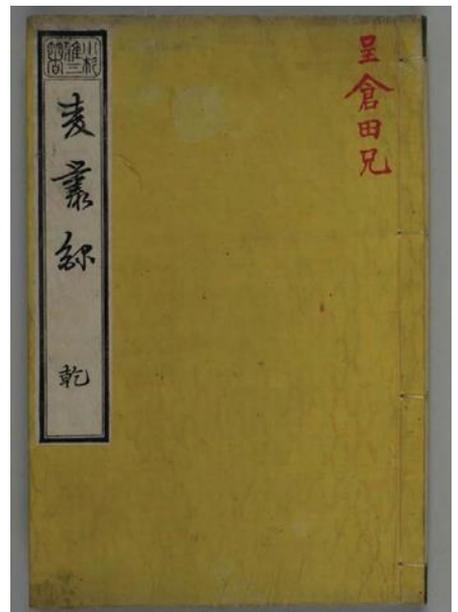
りたし甲斐もなく此の如き悲慘なる最期を見んとは掛けても思はざりし所痛惜に堪ふべけんや然りと雖も世の識者君が自殺を以て酒匂のそれと共に滔々たる世の風教に裨益する所少からずとなす君以て瞑すべく余等同學出身者亦た以て慰むるに足る噫君の靈希くは天上にありて長へに駒場の學風を護れ

大正七年二月二十一日

農學博士 横井時敬



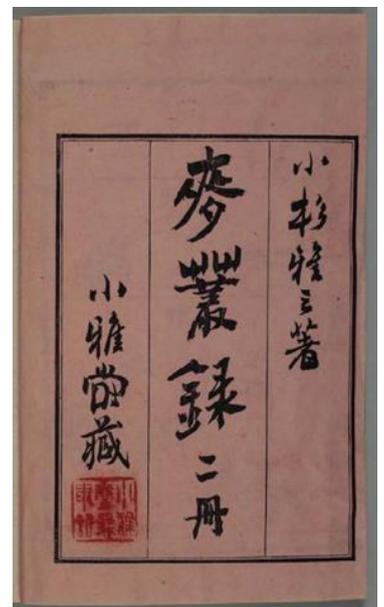
『麦叢録附図』 品港出帆之図 其の一



『麦叢録』(*)乾巻 表紙



『麦叢録附図』 品港出帆之図 其の二



『麦叢録』(*)乾巻 見返し

『麦叢録附図』

榎本軍として箱館戦争を戦った、小杉雅之進が、戦後投獄中に箱館戦中記録として書いた『麦叢録』。この附図とみられる二巻二十枚の絵が有り、内容に沿った図になっている。当時、スケッチ技術は機関士の必須技術だったと言われ小杉雅之進の手によるものとみられている。小杉家代々の宝であったが、本学百周年の時に曾孫の小杉伸一氏より寄贈された。「実学の杜」に縮小複製を展示しているが、この度、品川区立品川歴史館で実物の展示を下さることにになりました。

特別展示 明治維新ーそのとき品川はー
会期 平成三十年十月七日〜十二月二日

本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

T156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話… 03-5477-2526

FAX… 03-5477-2546